

# ガルブレイスの社会理論

——経済学の前提にあるものの知識社会学的考察——

領 家 穰  
元 浜 涼 一 郎

## I

社会はすべてその成員に対し、自己の所属する社会を認知することを保証する、というのが、ガルブレイスの主要なモチーフのひとつである。換言すれば、どの社会も、その社会を記述する体系の存在を保証するということになる。ガルブレイスに倣って言えば、これが通念 conventional wisdom である。これは、その記述の体系が当該の社会にとって、よりよく妥当するときは勿論のこと、時には、全く妥当しなくなった時でさえ生き続けることができる。自己が知悉する観念が人々の口に上るのは心地がよく、それに反して、他の人々によって支持されない見解を主張することは、その人物を決して愉快な状況の主人とはしないということ、そして何よりも、不快な現実を直視するのは不都合かつ耐え難いという理由で。

にもかかわらず、この不快に耐えうるほどに現実が不快さを増すときには、不承不承に、或は素知らぬ顔で、人々は事態に適応すべく新しい観念へと移り住んでゆく。

しかし、観念の世界の自覚的再編をこととする人物にとっては、無意識かつ自然な移行は存在しない。即ち、既存の観念体系、或は記述の体系 conventional wisdom を克服しようとするときには、新しい次元が要求される。新しい観念体系を構築しようとするれば、既存の観念を対自化せねばならず、それを通じてのみ彼はその仕事を成し遂げることができる。これは問題の提起と論争とを意味する。

我々はガルブレイス<sup>1)</sup>をそのような人物として扱う。これには二つの意味がある。即ち、ガルブレイスの論点を整理すること、もう一つは、それを通じて、我々自身の論点を開放することがそれ

である。あらためて言うまでもなく、この二つは別々の取り扱いを要しない。我々はこれを社会進化の問題として扱う。

1) John Kenneth Galbraith (1908～)

## II

ガルブレイスの主要な論点が、経済学に於けるセー<sup>2)</sup>の法則と結びついた市場—競争モデルの廃棄と、それに代わるモデルの代置への一貫した努力であることはよく知られている。ここでは、この新しいモデル構築への傾向の全てを包含する呼称を与えておくことが便利であろう。従って、我々は、便宜的に、これを組織—計画モデルと称することにする。

現代社会<sup>3)</sup>に於て、何故、市場—競争モデルではなくて、組織—計画モデルが必要となるかという点についてのガルブレイスの所説は以下のように整理できる。

(1) 市場—競争モデルが前提としていたのは、土地の生産力を基礎とする経済であって、従ってその生産は土地の生産力によって限界づけられているのに反し、現代の経済は、この限界を土地の生産力によって左右されているとはいえず、前者とは比較にならないほど大きな自由裁量権をもちかつ、これを行使せねばならないという責務をもちあわせ持つ。

(2) 市場—競争モデルが前提としていた経済社会とは、多数の相互にその規模に於いて大きな差のない生産者の一群と、それらを、その嗜好・需要によって制御し、支配する消費者の存在によって、経済上、或いは社会上の能率が保証される社会であるに反し、現代の経済社会は、少数の大規模な生産者による市場支配と、従って、消費需要

の管理が優位となっている社会である。ここでは消費者主権と、個人の自律的な欲望・需要とは形骸化された神話としてしか存在しない。

(3) 市場—競争モデルに於いて、経済社会を機能せしめる動因となるのは、利潤の極大化を常に意図する企業家・生産者、更には労働者個々の金銭的誘因であるに反して、現代の経済社会を機能せしめているのは、資本の所有と直接結びつかない経営者・経営生産組織による企業の成長と、それと不可分に結びついた威信、それを保証する為の市場の不安定要因・リスクの軽減への努力とである。いわば、前者が「利潤の法則」によって支配されている経済体制であるに反して、後者は、「成長の法則」によって支配されている経済体制だと言いうる<sup>4)</sup>。

(4) 市場—競争モデルに於いて、経済社会が円滑に機能するために何よりも必要とされたのは、市場に対する外的干渉の排除、とりわけ国家による干渉の排除であって、かの Laissez-faire Laissez-passer が至上命題となるに反して、現代の経済社会では、企業と国家との連携は極くありふれた事実となっていること、従って、国家との間に明確な境界を引きうるという意味での経済の自律性は存在せず、かつそれは、経済社会の円滑な運営上の阻害要因とは認められない。ガルブレイスがいう大企業体制 Industrial System がそれである。

## ○

以上の対比が包含する意味は、生産の問題を基本的に解決した社会と、そうでない社会との相違にあると看做すことができよう。生産力の限界に起因する財の絶対量が恒常的であると看做して差しかえのない社会に於ては、人口の増減のみが可変的要因であって、富の分配の問題もその中でしか生じない。そこでは、生産—消費の連鎖に媒介される市場の規模と範囲とは不変であると考えられるに反して、財の絶対量を相対的に増減することが可能な状態にある社会に於ては、生産—消費の連鎖によって媒介される経済活動空間は、伸縮の可能性を有する。財の分配に関してもその相対的な量ではなく絶対量のみを問題とする限りに於いては、甲の得は乙の損となるという意味でのいわゆる Zero-Sum ゲームは成立しない。更に

は、土地の生産力に依存する限りに於いて、自然現象とりわけ季節・時候の周期性にしばられるという意味で、あくまで、いわば他律的性格を有するに反して、土地の生産力から離脱した社会では時間の自律的編成の余地ははるかに大きい。

この意味で、前者は、あくまで静態的な社会であるに反し、後者は動態的な Affluent 社会だといえることができよう。ガルブレイスにあっては、この前者から後者への移行は連続的かつ継ぎの過程と構想されており、その挺子となっているのは技術革新の働きである。またそれを推進したのは、財分配の Zero-Sum ゲームから逃れようとする生産への脅迫的なまでの希求であり、それは殆んど至高かつ唯一無二の社会的価値にまで高められ、崇められるに至った。その帰結は、一方で恒常的なインフレーション傾向を、他方で、軍事支出とのみ結びついた「ムダ」の制度化、<sup>5)</sup>と社会的アンバランスという投資の偏りとなって現われており、ここにこそ、組織—計画モデルとその調整の実質的な課題が存する。

2) Jean Baptiste Say (1767~1832)

3) 現代社会という語で我々が指示するのは、端的にはケインズ革命以降のアメリカ(合衆国)社会であるが、ガルブレイスは、これを殆んど全ての社会の収斂傾向だと考えているようである。

4) この端的な表明は、例えば、「新産業国家論争」邦訳106頁

5) 都留重人教授の用語、この問題については、Has Capitalism Changed? 1961

## Ⅲ

ものごとの性格を際立たせようとするときには極論が必要である。現実の事態はどちらか一方の極にあるのではなく、その双方の間にあるとはガルブレイスの言である。まして、ことごとの性格が変化にあるときには、このことは決定的な意味をもつ。我々が為すべきことは、この変化—運動の全体的な方向を指示すること以外にはない。

現代社会を動態的な社会(Affluent Society)と看做すことは、それを等質な統合に到達した社会であると看做す見方とは相容れない。すなわち異質なものが相互に働きかけながら新しい平衡に到達しようとする社会を意味する。従って、現代

の経済社会は、市場—競争モデルがそのまま妥当する社会でも、組織—計画モデルに完全に合致する社会でもない。この両者の競合と、新たな平衡への過程である。しかしこのことは、両者の対等な競合を意味してはいない。ガルブレイスによれば、前者の史的な帰結が後者の存在となるのであって、前者は絶えず後者への質的変換の過程にあると考えられている。それを推進するのは、生産拡大、増強の主因としての技術革新の必要であり、従って技術への投資の膨張と、それを可能とする巨額な資本調達形式としての近代法人企業の存在である。財の生産が当該社会の成員の基礎的欲求（生存）の水準を越えたところでは、消費者の需要は幻想的な性格をもつ<sup>6)</sup>、そこでは、消費者の自律的に決定された欲望は存在しない。ここでは市場—競争モデルが前提としているような、消費者の需要が市場に反映し、かつそれによって生産者が影響され、制御されるという連鎖は働かなくなる。逆に生産者が、社会の内部に存する様々な観念を組み合わせて需要をつくり出す手段である市場調査や宣伝広告活動を通じて需要そのものを新たに作り出し、かつこれを制御する。連鎖は逆転する。欲望は欲望を満足させる過程である生産に依存する。即ち依存効果 (Dependent Effect) がそれである。しかしこのことは、市場支配力を有する側が他方を一方的に不利な位置へ追い込むことに帰結したとはいえない。自らの組織化によって、或は更に留意すべきは国家と結びつくことで市場支配力を中和せしめる働きとしての対抗力 (countervailing power)<sup>7)</sup>をも同時に引き起こす。しかし、いずれにせよ、原子 (Atom) としての消費者と生産者が相互に独立して取り引きするという意味での、市場—競争空間は現代の経済社会の特性を示すものとはいえない、というのがガルブレイスの主張である。

6) Marx はこのことを論理的可能性としては知っていたけれども、彼の時代には現実には主要な契機とはなっておらず、彼自身もこれを等閑視した。しかしこのことは同時に、彼の資本論第一章商品の叙述の論理的一貫性の問題として見れば、欠陥たるを免れない。

7) countervailing power とは、「競争」が市場の同じ側、売り手相互間での働くに反して、この私的な経済力の専断排除という意味での競争の代替物は、市場の反対の側に顧客と売手との間で働く。  
American Capitalism 1952.

#### IV

支配力は、生産に於ける稀少な資源、即ち、生産諸要素のうちで最も非弾力的なものに付随し、かつそれを保証する手段がその社会での至高の目的とされ、それに威信が付与されるというのが、ガルブレイスの命題である。従って、支配力が何に付随しているかを知ることは、その成員個々の社会への関与の誘因をも明らかにする。これは、多かれ少なかれ社会目標と常に斉合的に関係する誘因の体系として現われる。ガルブレイスのいう「一貫性の原則、Principle of Consistency がそれである。ガルブレイスはこれを歴史的段階として提出する。即ち、支配力は先ず土地の所有に、次いで資本に、更に今日では特定の質をもった労働力に、即ち、何らかの資格をもった才能の供給に結びついている。従って、それら当該の社会に特徴的な誘因もそれと並行して変遷する。土地に対しては強制 compulsion、資本に対しては金銭的誘因、そして今日では、仕事に対する共鳴 identification と、自己の目指す方向へと仕事の内容を変化させようとの希望に支えられた適合 adaptation とがそれである。この変化の背後に在るものは、技術革新と結びついた人間の発達論である。それが含意するのは、基礎的欲求によって組織・統合された段階から、基礎的欲求の充足が自明の前提として解決され、それが組織・統合の原理とはならない段階への移行にある。それは技術革新との関連でいえば、経験の概念の拡大と、従ってその質の変化を意味する。いわば直接経験の世界から間接経験の世界、シンボルの世界へと移行する。これが非動的な社会 (non Affluent Society) から動的な社会 (Affluent Society) への移行の意味である。ここでは、問題はこの両者に於ける情報の質と、その組織化の双方にまたがる。即ち、それはいずれにせよ我々の体験空間の生成と性格とに直接つながり、従ってそれを可能とする人間の発達段階として現われる。

問題が動的な社会 (Affluent Society) にあるときには、当然のこととして、等質かつ斉一な平衡に到達した社会を意味しない。動的な社会はその内部矛盾・不斉合をエネルギーとして動く

のであって、このことはその社会内部に先行する部分と、遅れて進行する部分の双方が同時に存在することを意味する。社会は等質な Atom の集合ではなく、異質な諸要素の統合である。これは財の配分に於て、また成員の社会参与の誘因の性格の相違に於いて、明らかとなる。ガルブレイスが現代社会の特性規定として提起した Industrial System (大企業体制) 内部に於ける 成員の階梯とその誘因とは社会の進化と人間発達の段階を表示する。即ち、①金銭的誘因のみをこととする株主、②金銭的報酬および幾分かは共鳴 identification を誘因とする生産労働者。そして共鳴と適合 adaptation が更に強化される ③ホワイトカラー、④経営者層とホワイトカラーとの間にあって集団によるデシジョン・メーカーに参与する組織・成員としてのテクノストラクチャ、⑤経営者層。以上のように図式化される。適合はこの順序で強化され、経営者層に於いて最強の誘因となる。誘因と支配力が付随する要素とは同じ方向で階梯化される。それは、" 個体発生は系統発生を繰り返す、" というかの生物進化の命題を思わせるほどの明快さである。また、人間の発達段階と、それを表示する誘因とは、その形成に参与する主要な要素をも指示することになるといえる。これは、あくまで生物学的欲求に初まるという意味で私的な、無自覚的な段階から、次第に対自的な機構の成立へと変化する。市場—競争モデルに於ける外的干渉排除の至上命題と、組織—計画モデルに於ける国家との連携とは、この間の事情の反映である。即ち、国家の生成・進化の過程が、この間の変化の主要な意味となる。誘因の変化に対応していえば、国家は先ず何よりも物理的強制力を背景とする秩序の維持者であることに始まる。これは出来ればないにこしたことはないという意味では非生産的負担以外の何ものでもない。いわゆる "夜警国家、" が要請されるゆえんである。次第に国家は性格を変じ、全体としての社会の内部に於ける諸利害の調停と調整者としての機能<sup>8)</sup>を、更には、生産に於ける最も非弾力的要因たる人的資源の養成と供給の手段である教育に於いて主要な役割を期待されるに至る。支配力は国家の形で現われる。ここでは、国家は社会そのものの計画者としての働きをもち、かつ社

会そのものの動因となることを意味する。従って国家そのものが既存の秩序維持、逸脱の監視という現状維持機能として働くのではなくて、秩序の不断の生産機能をその働きとする。ここでも、社会成員の生活空間は静的空間としてではなく、動態的な空間として現われる。国家は生活空間の不断の再編の主体としてその姿を現わすことになるしかしその一方で、"外部経済" はその意味を失い、国家と企業との関係は錯綜し、両者の境界の弁別は更に困難となる。Industrial System (大企業体制) に於いて、国家とは何かと規定することが要請されるが、ガルブレイスは現在のところそれについての著書を約束するに止まっている。

8) 例えば countervailing power の育成、総需要の管理など  
注「あとがき」を参照

## V

支配力は生産諸要素のうちで最も非弾力的な諸要因に付随するとしても、同時にそれは社会の特定の成員を通じて行使される。その意味で、何に力があるかということを知るだけでなく、誰がその力を有しているかを知ることが大切である。それを知ることによって我々は、社会参加に於ける我々の私的誘因を社会全体の在り方との関連に於いて眺め、位置づけることが可能となると同時に、それに対する適合 adaptation を強化することができる、というのが、ガルブレイスの、必ずしも明示的ではないけれどもしかし抜き難く存在する社会実践の観念であろう。

ガルブレイスによれば、現代社会に於いて、最も特徴的な現われはテクノストラクチャ Technostructure である。これは技術革新の直系の子孫ともいふべき存在で、それはその二つの特性の中に見い出される。即ち、高度の専門化とそれらの専門諸分野の組織・統合化がそれである。これは一方で、人間の全人的能力を信じないという謙虚さの表明であると同時に、何よりも時間の自律的編成に意味がある。更にその前提条件を為しているのは、経済活動空間の自律的制御の可能性である。かくてテクノストラクチャは一方で匿名で活動すると同時に、他とは明確に区別された特性を示す。その資格は、専門的な知識と能力とに

ある。しかし、このテクノストラクチャの支配力行使の帰結は、ガルブレイスにとって少しも肯定的結論とはならない。その支配の事実、テクノストラクチャが高度に発達しているところでは過剰が、逆にそうでないところでは品不足が、要するに生産量と製品の効用とが全く関連がないという帰結を生んだにすぎない。審美的対象は、この体制の中では身を置く場所に窮している。この事態に対処しようとするガルブレイスの戦略のひとつは、テクノストラクチャ育成の基盤ともいべき教育の過程に介在する教育者・科学者階層 Educational and Scientific Estate が自己の力を自覚すること、そしてそれを通じての国家—立法府への影響行使であると要約できる。これは、支配力は、生産に於ける非弾力的な要素に付随しそれを供給する手段に最強の力を与えるという彼の命題に照らせば、確かに現実的であるといえる。しかし、これは、皮肉なことだが、これ自身社会進化の結果として、判断そのものの弾力性を拡大したことで、“自覚、という特定の判断を通過せねばこの力は起動しない。この条件は何か、という問いは有効である。国家をいかに規定するかという問いは更に本質的である。ガルブレイスが近年に於いて、労働者、知識人の一切を含めた全党派統一運動とでもいべきものに着目し、その可能性を測っているらしく見える<sup>9)</sup>”というところからしてもこの問題は避けて通るわけにはいかない。これについても我々は今のところ約束されたガルブレイスの新著を待つしかない。

資源と誘因との関係を軸として組み立てられている彼の社会進化論が、今後どのような展開を示すかということは興味深い問題ではある。しかし我々自身の論点に少し触れるならば、それは、もの、就中生産力との関係でしか扱われなかった土地を、生活空間との関係でいかに扱うかに問題展開の鍵があると思われる。この問題の展開は我々自身の課題である。

9) 新産業国家論争, 邦訳105頁

#### 参 考 文 献

ここではガルブレイス自身の著書を挙げるにとどめる。  
American Capitalism 1952.  
revised edition 1956.

The Affluent Society, 1958.

second edition, 1969.

The Great Crash 1929, 1954.

The New Industrial State, 1967.

second edition, 1971.

A Contemporary Guide to Economics, Peace and Laughter, 1971.

The Libeartl Hour, 1960.

#### あ と が き

本論は我々のゼミナールでの輪読の結果である。マルクスの資本論の第1巻商品の段階で、その論理的一貫性における欠陥を中心として議論を進めて行くなかで、ガルブレイスを読んで見るとい元浜の提案に従ってその著書を取りあげることになった。

領家にとっての問題は、一貫して社会学が学問としての独立をかちとるための条件にあった。元浜にとっては卒業論文以来、社会学の方法が問題であった。ガルブレイスの conventional wisdom という概念は、まさしくこの問題にうってつけのものであったということができよう。一つの概念の背後には、つねにその概念がとり出されてきた社会的背景があり、通例このような背景は自明のこととして学者によって取扱われている。本論の中で示唆された通り、ガルブレイスにおいてもこのことは例外ではない。彼の著書において一つの概念がどのように発展してきたかの一例は土地 land の概念であろう。この語が彼の著書に登場してくるのは Economic Development in Perspective, 1962 以後のことに属している。そしてこの内容の体系的整理は The New Industrial State, 1967 においてはじめて行なわれた。それ以前においては彼の用語は estate であった。生産力との関係でしか扱われなかった土地が、生活空間との関係でいかに取扱われるかということはそれがどのような形で経済学にとり入れられるかということであると同時に、どのような形で社会学に結びつくかということでもあろう。

ガルブレイスは極めて多くの問題を提示しているが、それがまだ十分な熟成に至らないという意味で解決にまで及んでいない。オブセルバトワール・クラブに招待された討論会における多くの批判は、この点に集中しているといえよう。しかし、

新産業国家論の中に提出された幾つかの概念を上  
述の視点から検討すれば、この問題はおのずか  
ら解決するものと考えられる。ガルブレイス自身  
土地という概念を前面に据えたのが、この著にお  
いてであるように、estate と land の間には、他  
の人々が扱ってきたのとは異った意味合いがあ  
ったことを物語っている。それはまた市場—競争モ  
デルの廃棄に示されている通り、独立した—別個  
の存在としてという意味で—生産者と消費者と  
いう考え方の訂正をも意味するものであろう。こ  
の両者が嘗てはそれぞれ別な存在として考えられ  
ていたのに対して、両者が社会的存在としては、  
同一の存在の両面に過ぎないことを指摘している  
といえよう。社会的現実の中におけるこの両者の  
位置づけこそ、estate から land への移行を決定  
する動因となったものといえよう。そこでは市場  
との関係においてのみ考えられた生産者—消費者  
ではなくて、生活者としての生産者—消費者が意  
味されているといえよう。生活者にとって土地は  
まず何よりも生活空間の一部となるからにはかな  
らない。このことはまた、単に生産力としてでは  
ない、包括的な生活空間としての土地の問題が国  
家の機能の解明の手懸りを与えることとなる筈で  
ある。

この問題はすでに社会学にとって固有の問題で  
あったといえよう。<sup>注</sup>

conventional wisdom としての諸概念はこれ  
を具体的な社会の中に返して考えることによ  
って、はじめてその具体的な姿を現わすことにな  
る。ガルブレイスの中で無規定のまま採上げられ  
ていた—社会学的にみて—国家・土地・生産  
者が一つの体系として纏められることは、おのづ  
から明らかとなろう。それが我々に課せられたマ  
ルクス以後の課題でもある。これはまた実証研究  
における方法の問題をも規定する。ガルブレイス  
が纏めていないということは、纏っていないとい  
うことではない。体系化への途は、唯一歩を踏み  
出すことで十分といえよう。

本論を纏めることになったのは、このような意  
味合いにおいてである。本論は、元浜の整理に対  
する領家の整理の提出という形で、数度の討論を  
通して纏められたものでその纏めのほとんどが元  
浜によっている。しかしその責任は完全に両者の

ものである。訳語についてはかなりいろいろと問  
題があったが、一応、邦訳の出ているものに対し  
てはそのままにしたものが多い。ただ Affluent  
に関しては「豊かな」を選ばなかった。ただ仏訳  
においても“l'opulence”を用いていることから  
みて、異論のあることも考えられるが、「豊か  
な」という語のもつ conventional wisdom とし  
ての偏りを避けたかったことによる。

identification を共鳴としたのは、経済畑の  
人の手による訳出に原因があると考えられるが、こ  
の一事をもってしても、経済学からみて社会学や  
社会心理学はかなり遠い存在ではなからうか。

注 Tönnies, Mclver はもちろん、Alfred Weber  
の工業立地についての分析はこのことを示してい  
る。包括性の指摘ではなくて、その中における具  
体的な役割の分析が重要な課題であった筈である。